

## 論文の要旨

論文題目 音象徴語をめぐる普遍性と個別性  
氏名 飯田 香織  
学位 博士 (学術)  
授与年月日 平成25年3月25日

音象徴語は、外界や人の心的な様子や状態を模倣した語である。よって、日本語の知識を持たない言語話者や日本語学習者も、その意味を感覚的に音から理解することや、難なく学習することが可能なのではないかという考えがある。しかし反対に、音象徴語は日本語特有の語彙であり、上級の日本語学習者にとっても容易ではないという報告もある。よって、本論文では、日本語学習歴（もしくは韓国語学習歴）のない言語話者（シンハラ語母語話者・韓国語母語話者・中国語母語話者・日本語母語話者）を対象に、音象徴語の意味推測課題を行った。また、中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者を対象に、音象徴語の意味理解課題および読解テストを行い、音象徴語の普遍性と個別性について検討した。

本論文では、序論において、音象徴語研究の背景、定義を述べた後、第2章では音象徴語の普遍性に関する先行研究を概観した。まず、日本語母語話者は経験や学習を通して音象徴語の意味を理解しているということを、心理学・認知言語学・神経学的な観点から行われた一連の先行研究を通して明確化させた。続いて、非日本語母語話者を対象に行われた先行研究を3つの立場に分類して概観を行った。音象徴語の普遍性を主張した立場の先行研究では、有声音と無声音対比の意味の違いなど、音象徴語の限られた側面に焦点が当てられてきたことを指摘した。また、音象徴語の普遍性に中立的な立場の先行研究では、非日本語母語話者と日本語母語話者を対象に、音象徴語の音韻に対する印象の相違点について、その比較検討が中心に行われてきたことを述べた。最後に、音象徴語の言語個別性を主張した先行研究からは、音象徴語の音韻表現が表す意味は、日本語母語話者間でのみ共有されるという、言語個別性の強い特徴が示唆されたことを示した。これらの先行研究の問題点として、音象徴語が特定言語の特定語彙として意識されてこなかった点を挙げ、本研究における目的と課題を示した。

第3章では、シンハラ語母語話者・韓国語母語話者・中国語母語話者・日本語母語話者を対象に、日本語と韓国語の音象徴語の意味推測課題（音声呈示）を行い、その普遍性について言語学的類似性との関係で検討した。使用された刺激語は、韓国語と日本語の音象徴語であった。得られたデータから、4つの異なる言語グループすべてにおいて、日本語・韓国語の音象徴語の正答率がランダムであることが確かめられた。また、4つの異なる言語グループ間で、日本語・韓国語音象徴語の正答率に差がみられたことから、母語によつ

て音象徴語の意味推測の程度に差があることが確かめられた（日本語音象徴語 シンハラ語母語話者＝中国語母語話者＜韓国語母語話者＜日本語母語話者，韓国語音象徴語 シンハラ語母語話者＝中国語母語話者＜日本語母語話者＜韓国語母語話者）。さらに，決定木分析を用いて，3変数（音象徴語の種類，多義性，母語）が音象徴語の意味推測の正答・誤答を予測するかどうかについて検討を行った。その結果，音象徴語の意味推測に与える最も強い要因は「母語」であることが示された。特に，日本語の音象徴語は韓国語母語話者の正答率，韓国語の音象徴語は日本語母語話者の正答率が最も高かった。このことから，言語学的類似性が多い言語話者の方が，そうでない言語話者よりも，音象徴語の意味を良く推測できることが示された。しかし，4つの異なる言語グループのいずれにおいても，正答率の高い音象徴語には被験者の母語に類似した音象徴語があることが示唆された。これらの結果から，音象徴語は音から意味を直接理解出来るような普遍性は殆ど備えていないことが示された。

第4章では，中国語を母語とする日本語学習者に対して，音象徴語が適切に修飾する動詞について四者択一問題を作成し，理解度を測定した。さらに，読解能力で分けた上・中・下位群別に音象徴語の理解を分析した結果，読解力と共に音象徴語の理解も向上していた。3群の音象徴語の平均得点を使ってクラスタ分析を行った結果，得点が高かったクラスタは中国語にも類似の音象徴語があり，単義音象徴語が多く含まれていた。このことから，確かに，音象徴語の理解には，両言語の類似性や多義性の影響もみられる。しかし，読解との関係が強いので，音象徴語は自然に習得されるというより，主に学習によって習得されるべき語彙であることが示された。

第5章では，韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者を対象に音象徴語の意味理解課題と読解テストを行った。収集したデータから，性別・年齢・日本語学習歴・読解能力で同じ韓国人と中国人をペアー・マッチング・サンプリング法によって30組作成した。その結果，音象徴語の種類が正答率に強く影響していた。また，決定木分析の結果，半数の15語が読解に影響しているが明らかになった。さらに，言語間差が見られた音象徴語については，いずれも中国人母語話者の方が良くできていた。したがって，日本語と類似の特徴を備えた音象徴語を持つ韓国語を母語とする韓国人日本語学習者の中国語母語話者に対する母語の優位性は見られなかった。

第3章から第5章で行われた実験の結果から，音象徴語は普遍性よりも個別性の高い語であることが示された。日本語学習者を対象に行われた実験の結果から，特に読解能力が高い程，音象徴語の意味理解も高くなることが確かめられた。また，中国人日本語学習者を対象に行われた研究の結果からは，類似の中国語の音象徴語があつたとしても，学習者が各音象徴語の意味や用法を正しく理解するのは困難である場合があることが明らかにされ，経験的・直感的に音象徴語を学ぶことによって，音象徴語の意味を誤って理解してしまう可能性も示唆された。さらに，韓国人日本語学習者を対象に行われた研究からは，日本語学習者の母語に日本語の音象徴語と類似の特徴を持つ音象徴語を備えていたとして

も、その類似性から意味を理解するのは困難であることが明らかにされた。

本論文における以上の分析結果は、日本語教育において音象徴語は「音象徴の諸側面の利用法や母語の異なる学習者に対して音象徴のどの部分を重点的に教えるか」(王, 2011 など) という音象徴語の限られた側面に焦点を当ててではなく、特定言語の特定語彙として学んでいく必要があることを実証的に示したものであり、今後の音象徴語研究に応用することのできる新たな知見を提示するものと思われる。